ひといき

魏志倭人伝を読み直す―卑弥呼は縄文人の日御子

大阪大学名誉教授　長谷川　晃

はじめに

外国でしばらく暮らしながら日本を眺めると、日本人が、いわゆる西洋文明や、中国文明にはない独特の文化（culture）を持っていることに気づく。その一つは、日本人社会が性善説を基本にしていることだ。実際オレオレ詐欺の話を聞くと、日本人が極めて同胞を信じやすい習性を持っていることが分かる。あれだけ新聞やテレビで報道され、用心するように言われてながら、オレオレ詐欺に引っかかる人、特に女性が、後を絶たない。日本外交にしてもそうである。日本外交を他国から眺めると、これほど騙しやすい国はない。日本外交は他国も外交上の約束を守るということを基本にしている。第二次大戦の終わり頃まで、日本はソ連との不可侵条約を信じていた。ソ連に米英との講和の仲裁を頼んでみたりしていたが、逆に、戦後のどさくさまぎれに、ソ連は一方的に条約を破棄し、北方領土などを占拠してしまった。直近の韓国との関係も同様だ。こうした日本社会の持つ性善性は、日本人が縄文時代から引き継いだ母性社会性から来ている。母性社会の特徴の一つは、性善説を持つことだ。実際、自分の生んだ子供を初めて抱いた時に、この子は悪人だと思う母親はいない。これに対し、ユダヤ・キリスト教文明の国々は、基本的に父性文明国家で、そこでは人は罪の心を持って誕生し、神がこれを善人に仕上げると思われている。中国も、また中国文明の影響下にあるアジアの国々も基本的には儒教を基本とする父性社会である。こうした国々では、地続きの国の中で、家族を守って生き抜くには、男性がリーダシップを取らざるを得ないからだ。結果、これらの国々では性悪説を基本にしている。一方、日本は有史以前から島国国家で外国の侵略を受けたことはない。民族同士間の争いはあったが、民族の存亡をかけた侵略はなかった。この結果、日本は縄文時代から引き継がれた母性文明を持ち続けける数少ない先進国である。

ユダヤ・キリスト教文明で代表される西洋国家では自己は神が与えてくれた侵すべからざる個（かたまり）であり、いわば石のようなものだが、日本人の持つ自己の意識は極めて曖昧で、有るような、無いような、ものだ。実際、日本語には主語がない。禅宗では自己の中心は無であると考える。この結果、父性文明社会には哲学があるが、母性文明社会には哲学がないと言われる。ないというより、不要なのだろう。欧米社会では自ずからの考えをはっきり持ち、これを相手に分からせることをもっとも重要なことと考える。小学校の頃からこの訓練を受ける。これができないと一人前の人間とはみなされない。日本人は中心が無であるから、そんなことを突然言われても、ただただ困る。自己主張をしなくても心地よく住むことのできる社会に慣れているからだ。自己主張をし過ぎると逆に嫌がられる。

外国人にはお任せ料理の意味がわからない。料理は自分の好みの材料を好みに合った手法で料理してもらうのがあたり前であり、何が出てくるかわからない料理を注文することなど考えられない。しかし、日本人には懐石料理で代表されるように、お任せ料理は珍しくない。いちいちあれこれ注文するのを面倒くさいとも言う人も多い。それにはいくつかの理由があるだろう。一つには日本には食材が豊富でしかも季節に合った食材が手に入るため、板前に任せても安心できるし、とやかく言わない方が面倒がない。しかし、私は、この習慣の背景にも日本人の持つ性善説があると考えている。相手を信じる、板前を信じる、任せられた板前もその信に応えて精一杯腕を見せようとする。もっとも、西洋料理の一流シェフも自分の腕を精一杯出すわけだが、それは客の注文範囲の中での話で、料理の種類や内容まで任されるわけではない。日本社会は相手の善意に任せて極めて心地よい生活ができる。ここには個性はあまり要求されない。個性など出さない方が上手くゆく。この結果個性が要求される西洋社会から、つい、無視されがちである。私は外国に出かける時には自己主張をするメガネとしないメガネを持って歩き、飛行機の中でこれらのメガネを付け替えることにしている。

日本料理に関し、もう一つの重要な要素として自然と美がある、自然の恵みの材料をいかに生かすかが板前の腕の見せ所である。また、料理の見栄え、特に季節に合わせた美しさが要求される。薄味をベースに材料の良さを生かしながら、隠れた独自の味をいかに出すかが、要求される。手を加えてながら、手を加えているようには見えないようにしなければならない。同じ哲学が日本庭園や、生け花においても求められる。そしてこの考えを動作にしたのが茶道である。今回はこうした日本人の持つユニークな文化の起源を探ることにする。

縄文文化と縄文人

私はこうした日本人の心は一万年に及ぶ縄文時代に培われたと考えている。よく、日本人は縄文人の血を引き

継いでいると言われるし、確かにDNAの検査では、このことも事実である。しかし、ここで言う日本人の心は、文化であり、血ではない。実際ユーラシア大陸の東端の島国、日本には、有史以前からも大陸を追われて逃げてきた多種多様の人種がやって来ていると想像できるし、この事実もDNAの研究からも実証されている。それは、大陸の東端から船に乗ると、放っておいても日本に到達するからだ。しかし、ここからさらに東には太平洋があり、簡単には出られない。その結果、日本をいろんな民族が集結した古代合衆国だと言う考古学者もいる。

事実、最近の研究結果では、日本人は、ヨーロッパに於いて消滅したと考えられていた、ネアンデルタール人の血を最も多く引き継いでおり、これが、免疫異常からくるアレルギー反応を引き起こす要因となっているという。Michael Dannemann,1,2 Aida M. Andre´s,1 and Janet Kelso1"Introgression of Neandertal- and Denisovan-like Haplotypes Contributes to Adaptive Variation in Human Toll-like Receptors, The American Journal of Human Genetics 98, 22–33, January 7, 2016.

ネアンデルタール人は40万年ほど前に出現し、４万年ほど前に絶滅したと考えられている現在の人類以前の人類である。ネアンデルタール人の血を日本人が引き継いでいるということは、縄文人がネアンデルタールの血を引き継いだということを物語っている。つまり、縄文時代に既にアフリカからヨーロッパに渡ったネアンデルタール人が追われて日本までやってきたことになる。当時は既に日本海が出来上がっていて日本には船で海を渡らないと来ることができない。このことは縄文時代、現人類以前の人類を含め、日本には地政学上多くの人種がやってきていたことを物語っている。よく発掘された人骨から縄文人として毛深くて短足、濃いい顔の人間が描かれているが、上記の事実から、典型的な縄文人という人間は存在していないと考えられる。こうした体つきの縄文人は存在しただろうが、全ての縄文人骨を発掘したわけではないので、この姿が縄文人全体を表しているとは考えられない。それでは縄文人とは何かというと、それは周りを海に囲まれ、四季折々の季節に応じた自然の恵みが豊富にある土地に住み、採集生活をしていたことから生まれた固有の文化を持つ人々と考えるべきである。

長野県茅野遺跡で発掘された国宝縄文のビーナス

実際、現在、道ゆく日本人の顔形は様々で、どう見ても一人種とは思えない。むしろ、中国やその周辺の国々の人々の方が、顔つきが揃っている。共通している点はただ一つ、縄文時代から受け継いだ日本語を話し、自然を愛する母性文明社会と日本神道を信じる民族という点だ。

採集生活を長期にわたって続けていたことが生み出した縄文文化は一口に言うと母性文化である。このことは発掘された土偶がすべて、女性あるいは女神を表していうことからもうかがえる。人々は女性を中心とする小さなコミュニティーを作って生活していた。それだけでなく、環状列石を使って日読みを行い、暦を作る役目をしていたのは選ばれた女性だと考えられている。

古代の日本歴史書を読むと採集生活をしていた縄文時代から、稲作文化が始まった弥生時代の変遷が記されている。これに応じて人種的にも縄文人と弥生人の記述もあり、あたかも別の人種が日本に存在していたかのような印象を与えるものがあるし、縄文人、弥生人の顔形の違いまで紹介するものもあるが、先のネアンデルタール人の遺伝子継承の事実から、歴史上多くの人種がユーラシア大陸から日本に渡ってきたことは事実であり、弥生時代に突然別の人種が日本歴史を作ったとは考えられない。このことを証明するために日本に関する最古の記述である魏志倭人伝を再読してみよう。

魏志倭人伝を読み直す

日本の歴史は古事記、日本書紀の記述から始まるとされているが、これらは主に弥生以降の日本が、国家として成り立ってゆく有様を記述しているもので、神話を除いては、縄文時代に遡るものではない。最初に具体的な記録に残る日本の歴史は中国、三国志の中の魏志倭人伝とされている。これは３世紀の初め頃に書かれた歴史書であり、以前テクノネットで縄文日本を記述したとして紹介した老子より約700年後の話だ。日本ではすでに弥生時代が始まっていて、国家の成立が達成された頃と考えられる。しかし、大変興味深い事実は、魏志倭人伝で記述されている倭国の人々の有様だ。これを詳細に読むと、ここに記載されている邪馬台国の女王卑弥呼（日御子）も、当時、国家形成の途中にあった日本の人々も、その風習、特に人々が魔除けの入れ墨をして、男女平等に暮らしていたことなどから、どう見ても縄文人（縄文文化を継承した人たち）であったと思われることだ。

多くの歴史書では弥生人（中には渡来人と考える人も多い）が縄文人を淘汰、または、抱き込んで日本国家を設立したと記している。しかしながら、私は日本国を設立したのは縄文人だと考えている。確かに弥生時代には、古墳の発掘から、青銅器の使用、稲作など、人々は縄文人とは異なった生活習慣を持つに至ったことは間違いない。つまり、採集生活から、農耕生活に変わり、同時に

必然的に土地の所有権が誕生し、組織的な社会が誕生していたことは事実である。縄文人はその遺跡から、小さな集落単位で暮らしていたことが知られている。そこには国家建設をうかがわせるものはない。問題は、弥生時代を作りあげたのは別の人種か、縄文人達自身が社会改革をしたかである。文字を持たなかった縄文人達がこの間の経緯を記録しているわけではない。しかし、私は、縄文から弥生への変革は別の人種の侵入によるものではなく、縄文人達が自ずから農耕文化に適応した生活を始め、同時に国家建設をしたのだと考えている。その証拠は魏志倭人伝（http://www.eonet.ne.jp/~temb/16/gishi_wajin/wajin.htm）にある。この書は従来邪馬台国がどこにあったかの議論に使われてきた。大和か九州かの議論だ。私は別の立場で魏志倭人伝を読んでみたい。魏志倭人伝では、邪馬台国の位置の記録の後に人々の風俗の記述がある。それによると、

男子無大小　皆黥面文身　自古以来　其使詣中国　皆自称大夫　夏后少康之子封於會稽　断髪文身　以避蛟龍之害　今　倭水人好沉没捕魚蛤　文身亦以厭大魚水禽　後稍以為飾　諸国文身各異　或左或右　或大或小　尊卑有差

とある。現代和文に直すと、「男子は大人子供の区別なく、皆顔と体に入れ墨をしている。いにしえより以来、その使者が中国に来た時は皆大夫と称した（大夫は当時の中国で大臣の意味）。王朝の五代目の王の子は會稽（現在の浙江省）に領地を与えられると髪を切り、体に入れ墨をして蛟龍の害を避けた。今　倭の水人は水に潜って魚や蛤を採るのを好み、入れ墨は元、大魚や水禽を追い払う為のものだったが、後には次第に飾りとなった。諸国の入れ墨はそれぞれ異なっていて、左にあったり右にあったり、大きかったり、小さかったり、尊卑によっても違いがある。」となる。

ここで記述されている３世紀の日本人の入れ墨の風習はどう見ても縄文人のそれである。つい先頃まで残っていたアイヌの人たちの入れ墨も魔除けが目的だった。また当時、日本人が海に潜って魚を取るなど、採集生活をしていたこともうかがえる。続いて、その風俗や、国家の有様の記述として

其會同坐起　父子男女無別　人性嗜酒　見大人所敬　但搏手以當跪拝　其人寿考　或百年或八、九十年　其俗国大人皆四五婦、下戸或二三婦　婦人不淫不妬忌　不盗竊少諍訟

つまり、「その会合での立ち振る舞いに、父子、男女の区別なく、人は酒を好む性質がある。大人を見て敬意を表す時にはただ手を叩くだけで、跪（ひざまづ）いて拝む代わりとしている。人々は長寿で或いは百歳、或いは八、九十才の人もいる。その国の風習として、大人は皆４、５人の妻を持ち、下戸でも２、３人の妻を持つ場合もある。婦人は貞節で嫉妬しない。窃盗などもせず、訴えることも少ない、云々。

ここに記述されている、極めて平等な社会構造、酒づき、長寿、平和で安心できる社会も縄文社会のそれではないか、このような縄文文化が、前述の性善説社会を生んだと考えるのが妥当であろう。ここに記載されている一夫多妻の風習はおそらく縄文時代から続く通い婚のことを表しているのだろう。

この後に有名な卑弥呼の話が出てくる。

其国本亦以男子為王、住七八十年　倭国亂相攻伐暦年乃共立一女子為王
名日卑弥呼　事鬼道能惑衆　年已長大　無夫婿　有男弟佐治国　自為王　以来少有見者　以婢千人自侍　唯有男子一人　給飲食傳辭出入居處　宮室樓觀城柵厳設　常有人持兵守衛　等々。

現代語で書けば、「其の国はもと、男子が王となっていたが、七、八十年後、倭国は乱れ、共に女性を立てて王とし、卑弥呼と呼ぶようになる。卑弥呼は鬼道を能くし、人々を惑わす、（著者註：鬼道は老子から発生した中国の道教の一派と考えられている）。年配で、独身である。弟がいて助けて国を治める。卑弥呼を見るものはほとんどなく、千人ほどの召使いが自ずから侍っている、唯一人の男性が女王に飲食を運び、王の言葉を伝える役をしている。宮廷は柵をめぐらし、兵が常に警護に当たっている。」となる。

当時の日本を統率していたのは、女王卑弥呼である。中国は他国を記述するのに見下した漢字を当てるのを常としていたので、卑弥呼の名もこれ準じて変な当て字を使っているが、私は卑弥呼は日の御子、すなわち日御子を表すと考えている。そして、日の御子は縄文時代からの、女性による日読みの風習の名残だと考えている。日読みとは、縄文の環状遺跡から想定されるもので、太陽の出没を観測することで暦を決めることを言い、もっぱら女性の役割であったと考えられている。また、日本神話の天照大神の原型とも考えられている。このことから、弥生時代後期（３世紀）でも日本人は縄文の風習を守り続けていたことがわかる。弥生時代に生じた変革は稲作の普及と、これに伴う社会の組織化と国家形成である。魏志倭人伝を詳細に読むと、少なくとも３世紀の日本は縄文人（縄文文化を継承する日本人）が国家形成に関わっていたことがわかる。と同時に弥生時代を作ったのは縄文人だと言うことも確認できる。

日本国家の起源を弥生時代とし、この頃から多くの大陸からの移住があったとする説は人口増や、DNAの研究からよく言われている。また、縄文時代から弥生時代（大規模な稲作が始まり、考古学的には古墳や、埴輪の発掘調査から新しい時代、特に国家形成の時代が始まっ

た時代）への比較的順調な（争いのない）変革の事実も知られている。しかし、言語学的に世界に例をみない、日本人の話す言葉、日本語は縄文時代に生まれたものであることは間違いない。縄文文化は北海道から沖縄まで共通した土器や土偶の発掘から、日本固有のものとして１万年以上の長期にわたって育まれた。その中で自然との共存という共通した生活様式が生まれ、同時に共通語が存在したと考えられる。その名残が、アイヌの言葉と沖縄、特に宮古島に残るお祭りに使われる古語に見られる共通語だ。この共通性は縄文時代に既に共通の言葉を持っていたことを強く示唆している。これが、縄文文化そのものと同様、言語学的に他に例を見ない日本語を生み出したに違いない。一部には、現在の日本語も弥生時代に中国南部にいた倭人が持ち込んだものだという乱暴な説もあるが、日本語の持つ言語学的な固有性、主語がなく、いきなり目的語が来て、動詞が後に来る言語構成は明らかに漢語ではない。実際、老子も倭人であるという説があるが、老子の文章は明らかに、漢語体である。

日本固有の宗教、日本神道も縄文に起源を持つと考えられる。したがって、自然との共存、和を大事にする日本人の心も縄文時代に生まれたと考えられる。問題は弥生時代に大規模な外国からの侵略があったかどうかだ。魏志倭人伝の記述から少なくとも３世紀後半の日御子の時代は縄文人が弥生時代の国家形成に携わっていたと見るべきだ。魏志倭人伝に記されている卑弥呼（日御子）の国の人々は、薄毛の、のっぺり顔の弥生人の一般的イメージとは異なり、入れ墨をして海に潜る、縄文人のイメージである。魏志倭人伝は３世紀後半の書であり、この時代の宮殿跡、纒向遺跡が桜井市に発見されていて、これが日御子の住居と想定されている。また、日御子は天照大御神を表すとも言われている。その頃に、古墳時代が到来するが、これも３世紀後半の遺跡とみなされているので日御子とほぼ同時代かすぐ後のことになる。大規模な古墳が大和朝廷の大王のものとすると、大和朝廷も縄文人とみなすことができるのではないか？

いわゆる天孫系は国外からやってきたのかどうかに関しては議論があるようだ。私は、大きな勢力、たとへば、戦国時代の中国の一国家が難を逃れて日本にやってきて政権を確立したとは考えられないと思っている。その理由には三つある、一つは、もしそのようなことが起こったとすると、日本で新しい政権を打ち立てた勢力はもとの国（例えば周）における国家の名称を引き継ぐはずで、倭国の王と名乗る必要はないこと、次には、もしこうした大規模な移住があったとすると、中国の歴史書にその記述があるはずだが、今のところ、そうした記述は見つかっていない。そして、最も大事なことは言葉である。例えば、15世紀からヨーロッパの国々が南北アメリカに大規模な進出をし、当地を植民地化した時、何が起こったかといえば、彼らは自国語を持ち込んだことだ。これ以来、北米では英語と、スペイン語、南米ではスペイン語とポルトガル語が使われている。つまり、大規模な侵略があるとその国の言葉は侵略者の言葉に取って代わるのだ。これに対し、日本では縄文時代から引き継がれた日本語が今尚使われており侵略者を言語学的に断定できる相手国は見当たらない。前述の通り、縄文時代に既に日本で共通の言語が使われていたことは、沖縄の言葉とアイヌの言葉に多くの類似性が見つかっていることからもわかる。

私は縄文から弥生の変革は明治維新に似たものであったと考えている。明治維新で日本は世界に例に見ない速さで西洋文明を取り入れ、新しい国家形成を行なった。しかし、植民地化された訳ではない。人口も一挙に５倍ほど増加したが、移民によるものではない。生活習慣の変化と改良によるものだ。縄文文化を本音として持ち続けた日本人は必要とあれば、外来文化を受け入れるのが上手であるばかりか、急速にそれができる文化、つまり母性文化を引き継いでいる。これは老子で明記された、母性文明の柔軟さに他ならない。弥生時代にも、おそらく似たようなことが起こったに違いない。一部の縄文人達は、国家形成の必要性を大規模な稲作や、青銅器を持ち込んだ外来人から学び取り、その文化をいち早く真似たのに違いない。そして自ずからの手で、新国家体制を作り上げたのに違いない。だからこそ、この大きな変革の後も縄文人達の作った日本語が今尚使われ、彼らの心情が本音として生き残っているのだ。

終わりに

私は最近 Kindle Book から「老子と日本人に心－英語で読む老子」を出版した。この書で日本人の心、つまり縄文人の心を引き継いでいる現代人の心を最もうまく記述する古典は中国の「老子」であり、この分かりにくい老子を理解するにはその英訳を読むのが一番だというわけで老子を英語で読みながら紹介し、同時に日本文化について論じた。今回記載したテクノネットの稿はこの書をベースとして、老子との関連を除いたものだ。テクノネットでも、「英語で読む老子」を準備していて、ご紹介したいと思っている。

（通信　昭和32年卒　34年修士）